

令和 7 年 2 月

大学院文学研究科

藤原 慧悟 提出 学位申請論文(課程博士)

『中古語疑問文の研究』

審査報告書

國 學 院 大 學

藤原 慧悟提出 学位申請論文（課程博士）

『中古語疑問文の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、中古和文における疑問文の文型と意味の関係を論じた論文で、序章、第1章「中古和文における選択疑問文」、第2章「中古散文における話し手の意志をめぐる疑問文」、第3章「中古和歌における話し手の意志をめぐる疑問文」、第4章「中古和文における名詞述語の肯否疑問文」、第5章「中古和文における連体カ疑問文」、第6章「中古和文における引用句内の疑問語による疑問文」、終章の全8章から成る。

序章では、本論文の目的と意義を述べ、第1章以降の議論の前提となる先行研究についてまとめて本論文の立場を表明している。従来、疑問を表す助詞「や」「か」の違いを「問い」と「疑い」の違いや疑問の焦点の違いに結び付けて論じられることがあるが、反例があり適切ではないことを確認し、疑問文における推量の助動詞の有無が「疑い」「問い」の違いに対応している傾向が認められることを踏まえて、「や」「か」そのものの機能や意味を論じるのではなく、他の構成要素との連関による「疑問文」を対象として考察することを述べている。

第1章では疑問文のタイプの分類と中古和文における選択疑問文について論じている。一般に、疑問文は、「肯否疑問文（＝真偽疑問文・Yes／No 疑問文）」「補充疑問文（＝疑問詞疑問文）」「選択疑問文」という

三つのタイプに分類されることが多いが、選択疑問文の定義や位置付けは先行研究によって異なるうえに問題もあるとして、本論文では「何を疑問するか」ではなく「どう疑問するか」に注目して、選択疑問文を「疑問語を用いずに、複数の選択肢を提示する疑問文」と定義し、肯否疑問文・補充疑問文と並ぶ一つのタイプとして位置付ける。そして、中古和文作品に見られる選択疑問文は、「一か」を並列するもの、「一や」を並列するもの、「一や一」を並列するものに分けられ、「一か」を並列する選択疑問文は「一なり」に対応していること、「一や」を並列する選択疑問文は事態が肯定されるか否定されるかを問題にしていること、「一や一」を並列する選択疑問文はどの事態が肯定されるかを問題にしていることを述べている。

第2章と第3章では中古和文における話し手の意志をめぐる疑問文について論じている。散文を対象とした第2章では、話し手の意志をめぐる疑問文に、「む」を用いる場合と「まし」を用いる場合とがあり、何らかの行為の実行が決定していれば「む」を、行為の実行が未決定であれば「まし」を用いることを明らかにしている。一方、和歌を対象とする第3章では、散文で見られない文型が見られるものの、何らかの行為の実行が決定していれば「む」を、行為の実行が未決定であれば「まし」を用いるという違いが、おおむね和歌にも適用できることを述べている。

第4章と第5章では中古和文における名詞句を述語とする肯否疑問文について論じている。

第4章では名詞を述語とする肯否疑問文を扱っている。名詞述語の肯

否疑問文の文型をム系助動詞（「む・らむ・けむ・まし・じ」）の有無と疑問助詞の位置に注目して整理し、用例数が少ないもの、反語に偏るものなどを除くと、「や一名詞+む。」、「名詞+にや(+む)。」、「や一名詞。」、「名詞か。」が主な文型であることを示す。これらの文型は、述部にム系助動詞があるか否か、疑問助詞が述部にあるか否かの二点によって表し分けられており、述部がム系の文型は「疑い」に傾き、述部が非ム系の文型は「問い」に傾くという先行研究の指摘が名詞述語の肯否疑問文にも当てはまることを述べる。また、助詞が述部にある文型は疑問の焦点が述部にあり、助詞が述部でない文型は疑問の焦点が主語にあることを明らかにしている。

第5章では、活用語連体形に「か」が後接した「連体カ疑問文」を取り上げて、活用語連体形に「なり」が後接した「連体ナリ文」との対応を検討している。連体ナリ文の研究では、ある事実の事情を表現する「事情文」であることと、現代語のノダ文のように時間的に離れた事態が「結果は原因なり」で結ばれる例が連体ナリ文には見出しにくいという「一事態性」が認められることが指摘されている。本論文では、連体形ナリ文の特徴である「一事態性」に注目して、連体カ疑問文と連体ナリ文との対応関係を検討した結果、連体カ疑問文は、連体ナリ文と同じく一事態的な事情文として用いられることが多いことを明らかにしている。また、事情文以外では、名詞述語文相当の疑問文と「一べきか」にも連体ナリ文との対応が見られること、連体ナリ文と対応しない連体カ疑問文の例が少数見られることを指摘している。

第6章では中古和文における引用句内の疑問語による補充疑問文について論じている。これまで、「いつ見きとてか恋しかるらむ」のような引用句内に疑問語が現れる文を巡って異なる文構造の理解があり、通説と言えるものがない。本論文では、引用句内の疑問語が引用句以降にまで関係して疑問文を構成する「引用句内の疑問語による補充疑問文」であると解釈し、単純な構造の疑問文との比較と文型の広がりを書述している。まず、引用句内の疑問語による補充疑問文を、疑問語が疑問文の文末に係る単純な構造の疑問文と比較して、「と」「とて」などを伴う引用句が単独の疑問語と対応していること、疑問の焦点を絞った補充疑問文の一種であることを指摘する。次に、引用句内の疑問語による補充疑問文の文型について、引用句末は対応する平叙文と同じ形を取り、終止形・連体形・命令形・体言などさまざまな形があり得ることを指摘する。また、現代語では、引用句が述語に対して任意成分の場合や、引用句末に「判断のムード」が現れる場合には引用句内の疑問語による補充疑問文が不自然で、引用句が述語の格体制に取り込まれていなければ引用句内の疑問語による補充疑問文を構成しにくい、中古語では、現代語よりも自由に構成されていることを指摘する。さらに、補充疑問文の基本的な三つの文型（疑問語のみ、「疑問語—か—」、「疑問語—ぞ」）のすべてを取り得ることを指摘している。

終章では本論文の各章の結論をまとめ、今後の課題を述べている。

論文審査の結果の要旨

申請論文『中古語疑問文の研究』は、中古和文の疑問文の文型と意味の関係を論じ、新たな見解を提示した論文として高く評価することができる。

本論文の特徴は、単に個別の現象を扱うのではなく、「疑問文」に真摯に向き合っているところにある。特に、疑問文の捉え方を考察した次の二点が注目される。

第一に、疑問文の表す意味が助詞ではなく文構造によるものであることが具体例とともに説得力をもって論じられている点である（序章）。その中で「問い」と「疑い」という基本的な用語に二つの捉え方があることを指摘している点が特に注目される。すなわち、聞き手がいれば「問い」、いなければ「疑い」という阪倉篤義氏・仁田義雄氏に代表される「対聞き手性」の有無によって分ける立場と、答えを求めようとする「問い」とそうではない「疑い」という岡崎正継氏・山口堯二氏に代表される「解答要求」の有無によって分ける立場である。この差違は、「自問」の位置付けが前者では「疑い」に、後者では「問い」になるなど大きな差違であるものの、ほとんど意識されることなく、時に誤解を生む原因ともなっていた。本論文が先行研究を丹念に読み解き、両者の差違を指摘したことは、適切に研究史を描いたものと言える。

第二に、疑問文のタイプとして、選択疑問文を肯否疑問文・補充疑問文と並ぶものとして位置付けている点である（第1章）。一般に選択疑

問文は、肯否疑問文と補充疑問文に二分し、その下位に位置付けることが多い。本論文では、「何を疑問するか」ではなく「どう疑問するか」に注目し、肯否疑問文とは「疑問語を用いない点で共通し、選択肢を提示する点で異なる」とし、補充疑問文とは「選択肢の提示が可能な点で共通し、選択肢の提示が必須である点と疑問語を用いない点で異なる」と述べて両者との差違を示している。また、疑念解消の在り方に注目し、「肯定あるいは否定することによって解消される」肯否疑問文、「疑問語に内容を補充することによって解消される」補充疑問文に対して、選択疑問文は「提示した選択肢を択一的に選択することによって解消される」として、疑念解消の在り方が肯否疑問文・補充疑問文とは異なるため、両者と独立したタイプとして位置付けている。一貫性のある捉え方で傾聴に値するが、文を並列した選択疑問文を単文から成る肯否疑問文・補充疑問文と同列の「文」として扱ってよいかなど、さらなる検討が必要である。なお、一般に肯否疑問文は真偽疑問文と呼ばれることが多いが、疑念解消の観点から、「真偽」ではなく「肯否」を名称とするのが適切であるとするのは従うべき見解であろう。

このような疑問文に関する主張は古代語だけではなく現代語の疑問文研究にも影響を与えるものと言えるが、中古語の個別の問題を扱った第2～6章についても注目される見解を提出している。

第2章と第3章では文末に意志を表す「む」「まし」を用いた疑問文について論じている。行為の実行が決定していれば「む」を用い、行為の実行が未決定であれば「まし」を用いるとする。これを適用して「い

かにせむ」が「どのような行為を実行するか」を問題にするのに対し、「いかにせまし」は「ある行為を実行するか否か」を問題にするというように、これまで差違が不明であった表現にも解答が与えられた。

第4章と第5章では名詞句を述語に用いた疑問文を扱っている。第4章では、名詞を述語に用いた肯否疑問文を扱い、①「名詞＋にや（一む）。」②「―や―名詞―む。」③「名詞＋か。」④「―や―名詞。」の4文型が見られ、①②は「疑い」、③④は「問い」を表すこと、述語に助詞のある①③は述語に焦点があり、助詞が文中にある②④は主語に焦点にあることを指摘し、第5章では、「連体形＋か。」という疑問文が「連体形＋なり。」に対応した疑問文であることを指摘している。文型と意味や焦点の対応を見出した点が評価できる。

第6章では、「いつ見きとてか恋しかるらむ」のような引用句内に疑問語が現れる問題を扱っている。従来、引用句内の述語が連体形ではなく終止形なのはなぜか、疑問語がどこに係るのか、などが問題となっていたが、本論文では「疑問語―と―か―連体形。」という文型で疑問語が引用句外まで関係する補充疑問文であることを示し、「いつとてか」という表現に対して「いつ見きとてか」は疑問の焦点を絞った表現であるとする。また、引用句内の述語には終止形のみならず命令形や体言など様々な形が現れ得ることも示している。本論文の見解は、当該文型の存在を認識させるうえできわめて重要な指摘となっている。

本論文には、各種注釈書に目を配り、牽強付会な解釈にならないように慎重に用例を取り扱う姿勢がある。この姿勢は高く評価できるものの、

例外とした用例の中には本論文の立場から新たな解釈を与え得る例もあるように見え、再検討が必要であろう。このような課題は残るものの、今後研究を進めていく中で克服されるものであると期待される。

以上により、本論文の提出者藤原慧悟は博士（文学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和7年2月17日

主査	國學院大學教授	吉田 永弘	㊞
副査	國學院大學教授	小田 勝	㊞
副査	聖心女子大学教授	小柳 智一	㊞